



尾道市文化財保護委員
尾道ユネスコ協会事務局長

写真家 村上宏治

【八朔巡礼物語り】

第9話

事を成し遂げるとき。波乱万丈

商品の果実として…
恵みの果実として…
物語の果実として…
人それぞれであります、
育つていく柑橘を見ている
と、人の生きた証の結晶と
して私は感じ取っています。

偶然が重なって自然実生した
果実。後にその果実は八朔と命名
され、一四〇年が経ちます。

そして新しい柑橘として、全国
にその名前は知れ渡ります。その
八朔の生い立ちから、私なりに現
代までを調べていくと、当然では
ありませんが、そこに関与した人達
の物語があります。

幕末の日本、そして明治へと。産
業と言えば西洋の大国に並ぶも
のを持たない小国日本が、わずか
数十年でアジアを代表する国へ
と育ちます。何もかも手探りの小
さな日本が、大きく変わっていく
時代、そして大正・昭和へと。工業
も農業もすべてが手探りの中、激
しい変化に対応した数多くの人
の力が、令和の現代を支えてくれ
ているのだと、痛感するのです。

柑橘一つを例にとっても、数多く
の人が、日に日に変わる生産技術
を会得し、試みてはまた、新たに
試みる。試行錯誤その繰り返しの
中で成功もあれば、その何倍も口
に出せない失敗も数々あったで
しょう。その生き様の代表格とし
て、因島田熊の一人の青年、田中清
兵衛氏の生き方が、そのものでは
ないでしょうか。

田中家六男として生まれ、十二
歳で父が他界、兄が次々と他界し
気が付けば六男の清兵衛氏が後
継ぎとして一人残りました。母の
勧めで西条農学校に入学、そして
第一期生として卒業。

多くの卒業生は、中国大陸や大
都市圏に農業指導員として就職。
清兵衛氏はその思いを持ちつつ
も、田熊へと帰郷。暫くして、島の
柑橘に岡田イセリア介殺虫の大
発生で、壊滅的被害が発生、その
駆除のため島の介殺虫発生、柑
橘園の木を焼き尽くしていきま
すが、効果を得られず。若者達の
先頭に立ち、清兵衛氏は介殺虫の
天敵ベダリアアテナトウの飼育室
を設置し、増殖したベダリアアテ
ントウを無償で配布。因島での害虫

被害を食い止めることができま
した。

その後、農会勤務の農業技術者
として働き、ミカンを主軸として、
昼夜を問わず働き、その人望は生
産者の希望につながりました。

田熊のミカンと八朔その他の
柑橘類の声価は日に日に高まり
ます。大正十四夏、出荷組合の設
立を提案し十月に田熊柑橘出荷
組合を設立。出荷組合の結成で、
若い組合員は東京・京阪神の主
要都市の市場調査に入り、北アメ
リカ・朝鮮・満州への出荷も確定
し、田熊産温州ミカン・ネーブル
は海外へと輸出されていきます。
組合活動は後の県営検査制実施
の先駆けともなります。

組合による共同出荷の重要性
を説明し、組合の成果は年ととも
に右肩上がりとなり、国からも認
められる事になります。昭和二年
には七〇〇箱もの冬橙を北米カ
ナダの輸出に成功。国内において
も田熊の柑橘は高い評価を受け
ます。田熊の組合活動は、柑橘生
産者の生活向上につながり、更に
西条農学校の生徒を受け入れ実
習の場として農地を開放、寝食を

共にし、実習にかかる費用は清兵
衛氏の自費で賄われていきます。

順風満帆のなか、時代に適応と、
余剰柑橘の再利用を考え、昭和三
年、清兵衛氏の勧めもあり、田熊地
区に、田熊柑橘農産加工組合と、合
資会社芸備缶詰所として、田中清
兵衛氏がほぼ同時期にミカン缶
詰工場を開設。カナダ・アメリカ・
南方方面に輸出、昭和四年には七
〇、〇〇〇箱を輸出したと記録に
残ります。広島県は全国でも屈指
の缶詰生産量を誇っていました。

その始まりは、明治十年（一八七
七）頃、フランス人宣教師が、賀茂
郡在住の脇隆景氏に話をした「日
本の産物はヨーロッパの人が好む
ものがたくさんある。広島産の牡
蠣は最たるもの、（中略）缶詰
の技術がない事が残念だ」の言葉
に触発され、財を投じて安芸郡海
田にて缶詰業を開始したことが
始まりと言われています。缶詰自
体の技術はなく手探りから始め
た製造。安定するのはまだその先
の明治三十年頃。当初の缶詰は、
瀬戸内海の牡蠣・中国山地の牛・
ビワ・桃・栗・筍・松茸であり、特に
果実については地の利を活かし



昭和7年頃に、広島縣御調郡田熊村柑橘加工組合が出荷していた缶詰のラベル。



て、ミカンの缶詰市場が広がって
いきます。広島は缶詰産業は軍需
の関係で発達したとも言われて
いますが、一方で、地の利を活かし
た、豊富で新鮮な牡蠣・果実・牛
肉などがあつたことも発展の要因
とされています。

清兵衛氏が開設した缶詰工場
は、自宅の離れに設置、当時広島
県内には工場が三三ありました。
いずれの工場も従業員が二〇名
から多くて三〇名前後の小規模
での生産体制。広島県内では昭和
十年には五九件と需要に応じて
工場が増えていきます。清兵衛氏
の工場の輸出货量も順調に増えて
いく中、突然の知らせが入ります。
昭和十年、英国に出荷したミカン
の缶詰が大量に腐敗していると
の知らせ。清兵衛氏は、責任を一
身に背負い、先祖伝来の土地建物
を売却し、自ら運営する工場と、組
合が運営する工場の欠損を賄い
ました。その金額は当時六万円。
現代の貨幣価値に換算して、約二
億四千万円以上の金額となりま
す。村一番の資産家であった田中
家、昭和十年と言えば、西条農学
校の生徒を実習で受け入れてい

た時代。寝食を共にし、一切の経費
を賄っていたその背景には、破産
に近い状態があつたのです。

月刊柑橘誌『たちばな』に、誰が
歌い始めたか、田熊音頭の一節が
ありました。

「田熊生まれは 顔見りや解る
下がりまゆ毛に ミカン顔…」
たとえ苦難に遭遇しても、村のた
め、ミカンのため、家売つても笑
顔を絶やさず、わが身をいとわず
と、田中清兵衛氏を謡ったのでしょ
う。昭和十五年五月、田熊の恩人
として、また、心同じく共に頑張っ
てきた、多くの生産者と共にその
代表者として、生前に胸像が立て
られたと記載が残ります。



田中清兵衛氏の銅像設立当時の記念写真。前列中央が晩年の清兵衛氏。